



Title	日中身装文化の交流史：相互認識から相互摂取まで
Author(s)	劉, 玲芳
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81784
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (劉 玲 芳)

論文題名

日中身装文化の交流史
-相互認識から相互摂取まで-

論文内容の要旨

近代以降、西洋文化の影響によって、日本や中国において、人々の身装文化に大きな変化が起きた。日中両国のこれまでの研究では、「服装の近代化＝洋服化」という図式によって語られてきた経緯がある。しかしながら、「西洋化」という言葉に拘泥するあまり、隣国間の影響関係を見逃していた。たとえば、1920年代、日本の街を「支那服」を着て歩く日本人が現れたり、1910年代前後の上海では「東洋髻」（日本人女性の髪型）と「上衣下裙」（中国漢民族式）とを組み合わせた女性が見られたりした現象が生じた。こうした日中両国の身装文化（服装、髪型、身体意識）の交流や共有、混合の様相や、当時の服装交流史はまだ十分に明らかにされているとは言い難い状態である。

したがって、本論文はこのような先行研究上の空白の部分の補完するために、日中身装文化の交流に注目した。本論文は、近代東アジア視点から日中両国において、「身装」を媒介とした両国の交流を論じたことや、「他者」からの視点を導入することによって、東アジア交流史の研究分野に新たな一視座を与えるとともに、従来の日中両国の服装史の研究成果を更新するという意義がある。

第1部（第1章～第3章）では、日中間の身装文化の相互認識について論じた。

第1章では、日清修好条規（1871）の調印後から日清戦争（1895）以前まで、渡日の経験を持った中国人官僚が著した「東遊日記」の中にある日本人の身装文化に関する記述を考察した。具体的には、中国人の渡日の時期、目的、社会背景などの情報を総合的に考察した上で、彼らが書いた「東遊日記」について分析した。そして、「東遊日記」の具体的な作品を一次資料とし、そこに日本人の身装文化がどのように描写されているのかを明らかにした。中国人官僚たちは、日本人の身装文化に対して強い好奇心や興味を示した。日本における高度な洋服化の現状に驚きながら、中国人は明治維新の洋服化政策を批判していた。また、年齢によっても、賛否両論の意見があった。

第2章では、1900年代から1910年代を考察期間とし、日中貿易関連の資料を一次資料として、日中貿易に見る中国人の身装文化について、考察を行った。より具体的に言うと、日本人がどのように中国人の身装文化を研究し、貿易利益を拡大しようとしたのかをまず解明した。当時、中国人の身装に直接的に関わる商品は、貿易業者にとって非常に重要な品目であった。そこで、中国人の身装文化を含む人情風俗を研究しようとする動きが現れ、多くの出版物が誕生したのである。そして、輸入する側の中国で、どのように日本から輸入した衣料品や装飾品を当時の人々が消費していたのかを検討した。日本から輸入した「綿糸綿布品」が、各階層の中国人の下着、上着、常服、靴下、帽子などになったのである。日本からの輸入品は当時の中国人の身装文化をより豊かなものにしたと同時に、中国人の身装文化にとって不可欠なものとなった。こうして、当時の日本人が貿易資料で紹介した中国人の身装文化を明らかにした。

第3章では、日本人が著した一般言説（1910-20年代）に表れる中国人の身装文化に関する記述を考察した。1910年代以降、日本人が著した中国人の身装に関する一般言説が増加した。このような言説の中で、日本人がとりわけ強い関心を示したのは、中国男性の弁髪と中国女性の纏足であった。そこには、実情を写して伝えようとする彼らの意識と同時に、中国人に対する同情や弊習への批判、そして驚愕ともとれるような様子さえ見られた。そして、中国人の生活文化についても日本人は関心を示した。しかし、夏季の裸に対する意識、冬季の冬着の習慣などが両国の間で大きく異なっていたため、中国人の衣生活文化は後進的なものと見做されていた。一方、一部の日本人の間で新しい支那服観が誕生した。季節によって調節できる機能的な優れた実用性と、礼儀的、文化的な支那服の利点が日本人に認識され、賞賛されたのである。さらにいうと、和服・洋服との比較の中で、支那服が最優位な服装と唱える意見までもが出てきた。

続く第2部（第4章～第6章）は、日中間の男性の身装文化の交流の実態について考察した部である。

第4章では、歌舞伎俳優や知識人のほか、様々な日本人と支那服の関係について考察した。支那服、つまり長袍馬褂は様々な日本人男性に特別な楽しさをもたらしたという側面があった。歌舞伎の俳優といい、支那趣味の知識人とい

い、また、他の職業の日本人といい、支那服を着用することによって、和服や洋服からは得られないような新鮮さを得ることができ、楽しい体験もできた。ところが、支那服の着用によって、日本人が差別を受けたという一面があった。当時の日本には、日清戦争の敗戦国を軽蔑する風潮が残っていたから、日本人が支那服を着ることで、優位劣位の立場が逆転し、結果的に自分の同胞から軽蔑されたり、暴行をさせたりしたのである。このような体験によって、支那服を着た日本人は、中国人の気持ちを少しは理解できるようになり、中国人たちに同情を示したのである。

第5章では、中国人男子留学生の身装意識の変遷過程について、異文化と交流する中で生じた摩擦の段階、そして徐々に受容する段階、時代に伴って変化する段階、といった三つの段階を考察した。男子留学生たちは最初に日本人の身装文化に抵抗を示したものの、後に徐々に受容して行き、やがて溶け込むようになっていった。欧米への留学生が洋服のみを着ていたことに比べると、日本への男子留学生には学生服や和服という選択肢があった。その中でもとりわけ学生服は、留日男子学生の身分を表象するシンボルとなったようだ。そして、清国の留学生にとって、学生服は教育を受けるために強制的に着せられたものであったが、中華民国の留学生にとって学生服は、身近なものであり、積極的に受け入れようとするほど優越的な服装であった。つまり、中華民国の男子留学生にとって、学生服の意味は、単なる学校の制服ではなく、オシャレな服装でもあったのである。

第6章では、第5章に続いて、中国人留学生に愛着されていた日本人の「学生服」が、中国の本土に伝来してきた経緯について分析した。結果として、中国の教育界において、日本の教育理念や制度などを積極的に受容する一方で、「学生服」も教育制度の中の一つアイテムとして導入されたことが判明した。そして、学生服がいかにして中国人に受容されたのか、「学生服」と「中山装」とはどのような関係であったのか、を検討した。1920年代以降、男性の服装を改良しようとする社会変化が起きた。その際、学生服には機能性や経済性という長所があったため、そうした長所が一部の中国人の注目を集め、洋服よりも優れた服装と見なされ、さらに、一般の男性の間でも学生服が流行っていたようだ。そして中山装が、長袍馬褂や洋服のように独立した衣服の種類となる前に、ある期間において日本から伝来してきた学生服と混同されていたことを明らかにした。

第3部は、日中間の女性の身装文化に焦点を当て、彼女たちが相手国の身装文化をいかに楽しんでいたのかを検討した箇所である。また、相手国の身装文化の流行が起きた背景や原因も第3部で明らかにした。

第7章では、「日本に留学していた中国人女学生」と「中国国内の女学生」という二つのグループに分け、中国人女学生の身装における日本の影響を論じた。二つのグループの女学生の身装を分析することによって、「質素」な要素を尊重する思想が、「文明新装」において誕生した背景や経緯を明らかにした。清末民初という時代の転換期において、中国は日本を見本として女子教育の近代化を目指していた。そうした状況の中で、日本に留学した女学生が直接的に日本人女学生の身装に接近し、接触して、それを受け入れていった。それに対し、中国国内の女学生は、女学校や国の各種の服装規制によって、日本人女学生の「質素」な身装文化を受容し、間接的に日本の影響を受けていた。そして、この二つのグループは、最初は受動的に日本人女学生の身装文化の影響に巻き込まれたが、中国人女性の身装文化と融合してからは、自発的に好むようになっていった。そしてそれが流行となったのである。

第8章では、「東洋髻」に焦点を当て、従来の「東洋髻」伝来に関する言説を再検証し、中国で流行していた「東洋髻」が、実は日本の女学校の女学生や女教員の髪型であったことを解明した。日本から中国へ伝来してきた「東洋髻」は一種の流行の髪型に過ぎないと思われがちであったが、実は日本と中国の近代女子教育の交流と緊密に関わるものだったのである。また、「東洋髻」は1910年代の前半から一般の女性の間で流行し始め、1920年代まで続いていた。「東洋髻」の流行の範囲は、上海、北京などの大都市のみならず、南方の広東から、中部の湖南、東南の江蘇、北方のモンゴル、東北まで及んでおり、かなり広範に流行したものであった。

第9章では、日本において女性や子供の間で出現した支那服（当時の中華民国女性の上衣下裳・旗袍）の流行という現象に注目し、支那服が日本で流行っていた経緯を明確にした。1910年代から1920年代中頃までの期間、つまり支那服を認識する期間に、和服の改良のために支那服の利点が賛美されていたり、日本人が支那服に関心を示したりしていたことが判明した。ところが、1921年から1926年の準備期に入ると、支那服流行の兆しが表れ始め、さらに、演芸界の女優たちや裕福家庭のお嬢様・貴婦人たちの支那服姿が一般の日本人にもインパクトを与えることによって、支那服への注目度が一気に高まった。1926年夏以降、一般家庭向けの支那服の裁縫の記事が次々と出現し、1928年までの間に多くの日本人にとって「支那服」がより近いものになり、着る事のできる服装になった。

以上のように、本論文は19世紀の末期から20世紀の前半に至るまでの期間、日本と中国の間において、それぞれの国が相手国の身装文化をどのように認識していたのか、また実際にどのような交流が行われていたのかについて考察したものである。日中両国の言説資料や視覚資料を用いて具体的に検討していくことを通して、「身装」を媒介とした両国の交流を論じようとするものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (劉 玲 芳)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	准教授 岩井 茂樹
	副 査	教授 加藤 均
	副 査	准教授 佐野 方郁
	副 査	教授 五之治 昌比呂
	副 査	准教授 柴田 芳成

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本と中国における身装文化交流の実態を明確にしたものであり、「近代化＝洋装化」という単純な歴史認識を再検討、再認識することを目的としたものである。本論文における身装文化とは、服装、髪型、身体意識のことを指す。

本論文は、3部9章から構成されている。

第1部（第1章～第3章）は、日中両国が互いの身装文化を摂取するまでの期間を対象としている。両国が互いにその身装文化を認識し始めた時代の様相を明らかにしようとした部分である。

第1章は、日清修好条規（1871）調印後から日清戦争（1895）終結以前の期間を対象とした章である。ここで論者は「東遊日記」と呼ばれる一群の日記を分析対象とし、中国人官僚たちが一足先に近代化を果たした日本人の身装文化に強い興味を抱いていたことを明らかにしている。

第2章は、1900年代から1910年代の期間を対象にした章である。本章では、日中の貿易関連資料を一次資料として、そこに記載された情報から、互いの関心事を抽出している。

第3章は、1910年代から1920年代の書籍や雑誌などに記された言説を分析対象にした章である。日本人は中国人男性の弁髪や、中国人女性の纏足に強い興味を示したと同時に、夏季や冬季の生活習慣に大きな差があることに驚いたという。他方でこの頃、一部の日本人の間で新しい支那服観が誕生したことが論じられる。和服や洋服に比べ、支那服には高い機能性と実用性が認められたからだと言者は述べる。

第2部は（第4章～第6章）は、日中両国における身装文化摂取の内、男性の摂取に関して述べた部分である。

第4章は、1910年代から1940年代まで続いた日本人男性の支那服摂取の様相について論じている。その中には歌舞伎俳優や、「支那通」を自称する知識人たちが中心となって支那服が着用されていた様が述べられる。

第5章は、日清戦争後から日中戦争勃発前までの時期の中国人留学生を対象に、その身装文化の変遷に注目した章である。最初は抵抗感のあった留学生たちが次第に日本の身装を受容し出し、愛用するに至るまでの過程が明示される。

第6章は、清国末期から中華民国初期の時代を対象とし、帰国した留学生たちが中国本土に伝えた身装文化について述べた章である。ここでは、日本から移入された「学生服」が「中山装」へと変化していく様が丁寧に論じられる。中国国内では孫文が発明したとされる「中山装」が実は「学生服」から作られた可能性が高いことが、多くの写真や図像資料によって論証される。

第3部（第7章～第9章）は、女性における摂取の状況について述べた部分である。

第7章では、清国末期から中華民国初期の間に起こった日中間の身装文化交流の有様が述べられる。ここでは、中国人女子留学生の日本身装文化摂取と、中国国内における女学生たちの日本身装文化摂取の様相が述べられている。当時、日本でも中国でも「質素」な服装が奨励されており、それが両国の身装文化交流を促進させた主たる要因であろう、と論者は言う。

第8章は、同時期に中国で流行した「東洋髻」と呼ばれる髪型について論じた章である。従来、一時的に流行した髪型とされてきた「東洋髻」が、日本と中国の近代女子教育の中から誕生したものであり、それは1910年代から流行し始め、1920年代まで続いていたことが明らかにされる。さらにその流行は大都市のみならず、地方にも広まっていたことが明らかにされている。

第9章は、日本における女性の支那服について論じた章である。女性用支那服の流行は日清戦争以後、第二次世界大戦期まで続くものであった。1910年代から1920年代までは、和服改良論の中で支那服の優位性が語られてきた。しかしながら、1921年以降、支那服が流行し始め、1926年以降は、家庭向け支那服の裁縫に関する記事も登場し始め、日本人女性たちによって支那服がより近しい存在になったことが論じられる。

本研究によって、従来まったくといっていいほど語られてこなかった日中間の身装文化交流の様相が明確化された。日本語と中国語で書かれた記述資料と、多くの図像資料など、新出資料を含む大量の一次資料を用いて実証的かつ客観的に論じているため、全体として非常に説得力のある論文になっている。従来は曖昧であった「中山装」や「東洋髻」などの起源と実態が明確化された点も高く評価できよう。

以上のようなことから、担当者全員一致で、本論文が博士号取得条件を十分満たす内容を有するものであると判断した次第である。